

演 題 名：と畜場に搬入された牛の腸管出血性大腸菌 O157 保有状況

発表者氏名： 大西智子¹⁾、青木紀子²⁾、吉田紀美²⁾、二宮美穂¹⁾、河瀬 曜¹⁾、岡崎直仁¹⁾、木村琴葉¹⁾、
木村俊也¹⁾、青野 学¹⁾、望月昌三¹⁾、堀内道生¹⁾、岩崎 靖¹⁾、藤田 淳¹⁾、勇 孝徳¹⁾、
田中 博²⁾

発表者所属：1)愛媛県食肉衛生検査センター 2)愛媛県立衛生環境研究所

1．はじめに：健康な牛が腸管出血性大腸菌 O157(以下 O157 という)を保有していることは従来より知られており、食肉に関連した O157 感染事例も多い。平成 16 年秋、愛媛県内において食肉が原因と推察される O157 の散在的集団発生を示唆する事例が発生したため、県内のと畜場に搬入された牛における O157 の保有状況を調査したので報告する。

2．材料および方法：平成 16 年 12 月～平成 17 年 1 月に県内と畜場に搬入された 26 農場の牛 86 頭および平成 17 年 5 月～6 月に搬入された 29 農場の牛 109 頭、計 41 農場(14 農場については両季とも採取)195 頭の直腸便を採取して検体とした。検体をノボピオシン加 mE C で増菌後、CT - SMAC で分離培養を行った。

3．成 績：平成 16 年 12 月～平成 17 年 1 月に採取した 26 農場 86 検体中 6 農場 7 検体(8.1%)から、平成 17 年 5 月～6 月に採取した 29 農場 109 検体中 10 農場 18 検体(16.5%)から O157 が分離された。両季とも採取した 14 農場のうち、両季とも O157 が分離されたのは 2 農場、冬のみ分離されたのは 3 農場、初夏のみ分離されたのは 3 農場で、6 農場においては分離されなかった。品種別の分離状況は、和種 79 検体中 3 検体(3.8%)、肥育ホルスタイン種 85 検体中 17 検体(20.0%)、交雑種 31 検体中 5 検体(16.1%)であった。

4．考 察：O157 は夏季に高率に分離されたという報告があるが、今回の調査でも同様の傾向であった。調査した 41 農場のうち 13 農場(31.7%)の牛から分離されたことから、県内と畜場の出荷農場において高率に O157 が浸淫していることが確認され、また両季とも汚染が確認された農場もあったことから、生産現場での衛生管理が重要であると考えられた。いっぽう、今回の調査では和種に比べ肥育ホルスタイン種から O157 が高率に分離され、ホルスタイン種よりも和種において高率に分離される傾向にあるとする他の報告とは異なる結果となった。

今回の調査により、と畜場の処理工程での汚染防止対策の重要性が改めて示されたことから、さらに衛生管理の強化を徹底するとともに、食肉の安全性確保のために、牛における O157 の疫学的調査を継続していく必要があると考えられた。